

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 19 日現在

機関番号：32608

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23520367

研究課題名(和文) フランス植民地主義時代の旅行記におけるエキゾチシズムの諸相

研究課題名(英文) Exoticism in French travel writings in the modern and colonial periods

研究代表者

田口 亜紀 (Taguchi, Aki)

共立女子大学・文芸学部・講師

研究者番号：90600502

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円、(間接経費) 660,000円

研究成果の概要(和文)：旅行記研究は自己と他者という人文社会研究における根源的問題に関連している。エキゾチシズムの諸相を解明することは、自己と他者の関わり方を明らかにすることに他ならない。本研究は文学作品にあらわれるエキゾチシズムを分析することで、フランス語表現の旅行文学に新たな地平を開くことを目的とした。事典の項目執筆、日仏文化交流の可能性についての論文の他に、エキゾチシズムを実践するツーリストという存在に着目した論文「十九世紀フランスにおける *touriste* の変遷」に研究成果をまとめた。

研究成果の概要(英文)：The study of travel writing concerns the relationship between the traveler himself and others, which is a radical question in the area of social studies and humanism.

These authors began by considering several pertinent aspects of exoticism in modern French literature, pointing out that the analysis of exoticism elucidates this relationship. Authors further published articles in an encyclopedia, a paper about cultural exchange between France and Japan, and an additional paper, *Traveler our Touriste? ; Distinctions in Meaning in Nineteenth Century France.*

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学 ヨーロッパ文学

キーワード：フランス 文化交流 エキゾチシズム

1. 研究開始当初の背景

(1) フランス文学における旅行記は、歴史学、民族学、地理学をまたぐために、文学的アプローチの確立が遅れた分野である。だが、旅行記研究は「自己と他者」という人文社会研究における根源的問題に連関しており、充実した研究が急務であった。いかなる旅行者も訪れる土地で異文化理解を試みるのであるから、その過程を記述する旅行記は他者を問題にすると同時に、他者との接触によって余儀なくされる自己の変容を描くことになるからである。

(2) 旅行記は文学とルポルタージュの境界に位置し、規範を持たないために低級なジャンルとされてきた。つまり散文小説の一種、エッセー、又は他分野の付属物という認識でしかなかった。しかし旅行記作家は訪れる土地で異文化理解を試み、他者を問題にすると同時に他者との接触によって余儀なくされる自己の変容を描くことになるのだから、極めて文学的主題を呈示することになる。旅行記をコーパスとすることで、このテーマについての考察は深くなる。

(3) 「エキゾチズム」という語の初出は1845年である。この「イズム」は広がりを見せるが、これは1870年代移行のフランス第三共和政の植民地主義と帝国主義に結びつく。フランス人旅行者の目から異国を描き、また植民地に入植したフランス人の視点から植民地の現実を描く植民地主義文学が隆盛し、エキゾチズムが氾濫する中、多用なるものを擁護する新しいエキゾチズムの可能性を提案できると考えた。

2. 研究の目的

本研究では、現代における多文化主義の諸要因を考察する上でも、これまでの研究成果をもとに、示唆に富む旅行記テキストを分析することが緊急課題だと考えた。異文化体験では、理解と偏見の諸相は個人の問題であると同時に、文化的社会的背景の影響が大きい。その一方で、人が異郷に旅立つ理由として、異郷への憧れ、すなわちエキゾチズムが挙げられる。このように旅行記には他者に魅了されると同時に他者に同化したいという欲望が見いだせる。このアンビバレントな欲望は他者理解にどのように作用するのかを探ることが本研究の問題である。

3. 研究の方法

(1) 旅の動機となるエキゾチックなものへの憧れは古代からあったが、それがフランスの集団心性として、「イズム」の形を取るのには十九世紀である。そして過去への夢想というべき懐古主義と平行する、遠方への夢想と

いうべき異国趣味(エキゾチズム)の流行が植民地主義、帝国主義の時代と軌を一にしていることに注目した。その場合、国家の同化政策は文学における同化=所有の論理の本質とは何か、それは取りも直さず、植民地政策とエキゾチズムの関係を探る研究を行うことが必要だと考えた。

(2) 1860年から1960年において、西洋と非西洋の関係はすなわち「帝国」と「植民地」の関係である。

西洋と東洋の一方向的な関係が確立された時期の文学を読み解く必要があるので、この時代に読まれた植民地主義文学の書誌を完成させる。十九世紀からフランスは植民地政策を取り、「文明化の使命」のイデオロギーを浸透させていった。これは文学にも反映し、二十世紀初等には『植民地選文集』が編まれ、フランス文化の優位性と植民地支配の正当性を宣言している。

(3) エキゾチズムの諸相を解明することは、自己と他者の関わり方を明らかにすることである。この点に着眼しつつ、文学テキストの読解を進めていくことが、本研究計画を進める上で鍵となった。

4. 研究成果

(1) 本研究では、十九世紀におけるエキゾチズムの因果関係を検討したが、旅と文学を考察する場合に、これまで十分に光が当てられてこなかった観光と文学の影響関係にも言及することとなった。旅行記において、異国を感じさせるエキゾチズムとオリエンタリズムの関係を解明した。

(2) 『フランス文化事典』(丸善出版)でガイドブックと観光に関連する項目を執筆し、いまだ十分に検討されていない問題点を喚起した。特に、本研究課題に関連する事項として、ガイドブック『ミシュラン・ガイド』と『ギド・ブルー』における問題点を取り上げた。近代観光旅行の誕生以前に存在した、代表的な旅行案内書は、古代にはパウサニウスの『ギリシャ案内書』やストラボンの『ギリシア・ローマ世界地誌』があったが、これらは地理や歴史などの学問的見地からの考察であり、実用的な記述ではない。その後、ガイドブックは特定の目的を持った旅行者に向けて書かれていたが、一般大衆のレベルまで拡大していないのは、旅が簡単に行えるものではなかったからであった。十九世紀になり、鉄道網の発展により、手際よく旅行ができるようになった。この世紀の旅行は、新しいものの発見ではなく、また、有閑階級だけのものではなく、一般大衆が行う観光旅行へと変化していった。旅の目的は、新しいものの発見ではなく、古いものを再確認し、再

解釈するものになり、ガイドブックは、いかに効率よく町をまわるか、という点に重きを置くことになる。旅でエキゾチシズムを見いだすことが難しくなるのは、旅行者にとって未知のものが少なくなり、ガイドブックに知識が与えられることに関連するのである。

(3) 植民地時代の文化交流という点に着目すると、日仏の関係において、エキゾチシズムのテーマが大きく取り上げられるだろう。本研究では、この二国間の文化交流を促進する一要因としてのエキゾチシズムを、一雑誌の果たした役割から論考した。

(4) 十九世紀のフランス人作家ジェラルド・ネルヴァルの東方旅行記をコーパスとし、そこに現れるエキゾチシズムについて考察した。ネルヴァルの旅行記では、旅行者は異文化に真正面から対峙し、別の次元に足を踏み入れる多層的な存在である。シテール島では女神やキリスト教信仰の秘儀を知ろうとし、エジプトではピラミッドの内部でイスラム信仰を呼び起こし、レバノンではドルーズ教の娘と結婚して、門外不出の教義を修得したいと望むのである。さらに旅行者はオリエントの街を散策すると同時に、オリエント社会の深淵に降りていく。このような旅行者はエキゾチシズムによって一時は異国に惹かれつつも、異文化が人間存在の本質に深く関わることによって、エキゾチシズムを超越するのである。

(5) エキゾチシズムにとらわれるのは、ツーリストの特徴である。

旅行記においては異国を感じさせるエキゾチックな描写と、植民地主義的な言説が混じる点に着目し、エキゾチシズムとオリエンタリズムの関係を解明した。

研究対象は、主に十九世紀後半の植民地主義時代の文学に限定し、エキゾチシズムの因果関係を検討したが、研究課題からはずれる、次の二点について疑問を残すことになり、世紀前半に立ち戻る必要を感じた。一点目はガイドブックの役割、二点目は「観光」と「観光客」の語の定義である。旅と文学の関係を考察する場合に、これまで十分に光が当てられてこなかった観光と文学の関係に、研究代表者は新しい研究の意義を見いだした。

すなわち、十九世紀以前ではガイドブックは商人、巡礼者、職人用に特化されていたが、十九世紀前葉に相次いで万人向けのガイドブックが刊行された。ここから必要な情報が得られ、安心して旅立つことができるようになった。これによって、無目的の旅、楽しみのための旅、つまり「観光」という考え方が生まれた。その一方で職業作家による旅行記の立ち位置が問題になる。旅行記作家は読者の獲得、又は読者への有益な情報の提供という目的から、ガイドブックの内容を踏まえて、旅行記を執筆している。ところが旅行記は小

説同様、読み物とされる以外に、情報源として利用される場合、これが旅行者の過去の回想である以上、時間による風化は免れない。

「観光客」(touriste)の語は英語(tourist)から導入されたが、1816年におけるフランス語文献での初出では「イギリス人旅行者」を指していた。十九世紀を通して旅の文脈の変化、ひいては旅行者の行動様式の変化にあわせて語のコノテーションが変化し、現在では一般的に「旅行者」の意味で使用されている。フランス十九世紀中葉までの文献、特に旅行記に現れるtouristeの語を拾い上げ、この語の指示対象を丹念に追い、付与された意味を検討することでヨーロッパにおける近代ツーリズムの勃興期の特質を抽出するという新たな研究課題を見いだすことになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

「旅行者かツーリストか? 十九世紀フランスにおける“touriste”の変遷」, 田口亜紀, 『共立女子大学文芸学部紀要』(査読あり), 第60集, 共立女子大学文芸学部, 17-34頁, (2014).

https://kyoritsu.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=2997&item_no=1&page_id=28&block_id=27

ネルヴァル『東方紀行』スイスまでの旅案内書、写真機、時刻表をもたない旅」, 田口亜紀, 『仏語仏文学研究』(査読あり) 第42号, 東京大学仏語仏文学会, 67-78頁, (2011).

「ネルヴァル『東方紀行』におけるデルヴィーシュの表象」, 田口亜紀, 『フランス語フランス文学研究』(査読あり) 第97号, 日本フランス語フランス文学会, 133-145頁, (2011)

「ダルヴィーシュを描いたフランスの作家たち」, 田口亜紀, 『地中海学会月報』(査読あり), 359号, 4頁, (2013)

[学会発表](計1件)

「旅と文学」, 田口亜紀, 日本フランス語フランス文学会秋季大会、於別府大学、2013年10月27日.

[図書](計2件)

「日本人執筆者」, 田口亜紀, 『満鉄と日仏文化交流誌「フランス・ジャポン」』(和田

桂子, 松崎硯子, 和田博文編, ゆまに書房)
のうち一章, 142-163 頁, (単行本) (2012)

フランスの社会と文化、第2章 生活「ガイドブック『ミシュラン・ガイド』と『ギド・ブルー』」、 「自転車」第5章、ルネサンスから大革命へ「ズボン」第6章 ロマン派の歴史 「新聞と連載小説」、 「パノラマ、ジオラマ」、 フランス文化の多様性、第8章 パリと郊外「イル・ド・フランス」第9章フランスの地方、「サン・マロ」、 「音と光のスペクタクル」第10章フランス語圏「タヒチ(フランス語圏)」ほか事典項目, 田口亜紀, 『フランス文化事典』, 田村毅ほか編, 丸善出版, 60-61, 111, 146-147, 164-165, 180-181, 329, 369-375, 500-501, 529, 604-605, 632 頁, (単行本) (2012).

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

田口 亜紀 (T a g u c h i A k i)

共立女子大学
文芸学部
専任講師

研究者番号：90600502

(2) 研究分担者

なし

研究者番号：

なし

(3) 連携研究者

なし

研究者番号：

なし